關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（358）2271
（一部10円）

一面　有田教授の剽窃
二面　論説、沖縄、コザ暴動
三面　ウーマン・リブ、乱気流
四面　書評

有田（経）教授、剽窃

改革案の腐敗性露呈

事件隠弊の教授会

本学教授、有田稔氏の剽窃行為が表面化したにもかかわらず、大学当局、および経済学部教授会はこの剽窃事件を闇に葬り去った事実が明らかになった。さらに、この件に対して何ら具体的な結論を出し得なかった学部教授会の組織的責任が問題にされてきている。"学内秩序"回復＝支配体制強化を「改革案」「千里山ロック・アウト」をもって、強行せしめんとする大学当局の方針と、その動向は明確にわれわれに適対し桎梏として迫ってきたといえる。日々の支配、抑圧強化は、今や学生の"日常性"を強いることによって推しすすめられている。大学当局にとって、苛々とした"並隠状態"の中で、その欺瞞性を暴露しつつも、斗争弾圧、治安維持を計る支配者は、この有田剽窃事件を隠蔽化した。その犯罪性を追究、糾弾し当局の動向に焦点をあてたもの。（編集局）

教授の良心を問う

有田稔経済学部教授の教科書「経済体制と第三有効需要」は四十四年頃より、有田氏が経済学のテキストとして使用、学生に調達していたものであるが、発刊当初より経済学院生の間で問題とされてきた。有田氏は、一橋大教授林栄夫著「ビルト・イン・スタビライザー」より、七十ページ余りの範囲を剽窃していたので、従来よりこの剽窃行為に対する指摘があり、有田氏と経済学部教授会に対して公開質問状が提出され、教授の学問的良心と学部教授会の責任を追究した。しかし、これに対して学部教授会でも問題とされてきており、一年余り評論されてきたが結局は学長ともに結論を出

経済体制と第三有効需要

この教科書によって教えられるものとは？

し得ず、その間に公開質問状は握りつぶされ、犯罪性を隠蔽化していったということである。

「経済体制と第三有効需要」では、今年四月に久松俊一助手をレッド・パージし学部の"関大経済論集"に論文を発表していないので学業成績がよくない）という名目で極秘のうちに放逐している。この不当処分さらに有田剽窃事件に関しても、学部教授会の名で、具体的な学問的常識の内容は明示されておらず現在的な教授会の無内容性が問題となってきた。助手の学問的常識云々が、単に「関大経済論集」に論文を発表しなかったということで評価し得るものであるのか。そのことは、経済学部における助手、助教授、教授を含めたところの教授陣の学問的強化体制の回答としての表現であるのか。これにいたっては、まったくの欺瞞であることは明らかであり、"改革"すら後退現象＝学園闘争の弾圧、治安維持の産物でしかないということである。

さらに、有田氏の剽窃は教授の学問的良心を問うものとして許容し得るものであるのか。その剽窃行為によって発刊された教科書で教えている"学問""教育"の内実とは、いったい何であるのか。有田氏の剽窃を容認し、その犯罪の隠弊を計る学部教授会は自らの組織的責任に対してどうするのかを全学生の前に明らかにする必要があろう。全学生は、まずこれらの点に関して追究し、一教授の学問的犯罪に超因しつつも大学当局の体質＝歪みによって、隠蔽化されに事実に対して追究、糾弾していかねばならないといえる。

有田氏の剽窃行為は、単に氏が謝罪し、あるいは林栄夫教授に七〇ページあまりの問題箇所の無断転載を容認してもらうといったことでその犯罪性がなくなるものではない。剽窃した有田氏こそ学問的蓄積がなかったということであり、その犯罪を隠蔽化することによって支えられている学部教授会の在り方が問題といえる。剽窃に関しては、過去において経済学部の「経済学論集」に、他から剽窃した論文を発表したM氏の剽窃事件がある。この件では、M氏の一ケ年謹慎処分が決定されたが、有田氏に関しては、抹殺されるべき学者的生命には何ら関わりないところで終らせたということである。

教育への疑問と不信

日本資本主義分業体制の下に組み込まれ、知的労働力商品の生産の場として資本の要請に応じた教育内容しか持ちあわせぬ"大学"の中で自治のイデオロギー再編の動向に同ち敏感に反撃することなく、教授＝支配者＝学生＝被支配者の固定した関係に固執し、ひからびた権威主義を振りまわしていっさいの斗争を圧殺してきた教授会＝学校当局は、全共斗との理論斗争に屈状していったにもかかわらず、中教審答申、大学立法の制して教育によるイデオロギーの帝国主義的再編を推し進めていった。その表現形として、今度の有田剽窃事件に何ら対処し得ず、学部教授会の態度を明らかにすることなく、厚顔に学生に対して講義をつづけ、個人的に謝罪することで問題を終息させているのである。そういった内容をもつ教授会が、現在的には、"教授会自治"が存在するのではなく、大学当局権力によってすでに突き崩され、解体、上からの再編への道を歩んでいる。明白に、問題を学長あるいは学部長辞任によって解決させていこうとする事実は、理事会の支配下におかれていることが根拠である。その下で、行なわれている教育内容とは、まさしく学問的内容を語り得る以前に資本の論理そのものを貫徹せしめる学生への支配強化であり、いっさいの学問の運動性の圧殺、思想生活の領域にいたるまでのてっていした管理体制、個人的発展の圧殺である。

そのことによって、日帝の動向に喜々として便乗していった彼らが出してきた「関大改革案」なるものの欺瞞性が明らかに暴露されるであろう。有田氏の剽窃は、その学問的犯罪性とともに、その犯罪を全学の前に明らかにすることなく、闇に葬り去ろうとした教授会、大学当局の策動が問題であり"学問"の領域に学生を排除せしめることであくまで教授の権威を保持しつづける、教授会の腐敗であり、つまりは資本主義体制の矛盾を凝縮したものとして存続しつづける"大学"が、その産物まみれに動めく金物によって、支配され支えられているということである。

学内秩序回復＝正常化＝ファッショ的教育の再編強化の方針を貫徹せしめんとする大学当局の動向は、具体的には千里山におけるロックアウト（休日、夜間の学生立入禁止）をもって、「関大改革案」路線に乗り、中教審答申、大学立法によってそれを推進してきた。いうまでなく、支配階級は意図的に大学の管理運営権の収奪を計り、教授会構成への介入として具体的に"教授会自治"すら破壊せしめ、体制枠内に閉じ込めんとし教授会自主規制を強要してきた。そして、今や教授会の近代合理主義は、まったく帝国主義ブルジョアジーの大学の帝国主義的再編に便乗するものとして展開されている事実である。その延長上に、有田剽窃事件の教授会、大学当局の犯罪の背景を見ることができる。

このような大学当局の動向と、管理、抑圧体制の再編強化の彼らの方針に視点を置きつつ、追求し、そして対象化していくべきものに対して再度確認する必要があだろう。

明確に、有田剽窃事件は現教育への根底的な疑問と不信を誘導させていくといえる。欺瞞と腐敗の上に立ったところの教育体制とその内容が、すでに学園斗争によって追究され糾弾されていった"矛盾"とは異なった質で学生への桎梏として存在し、迫っている。大学当局は、彼らの敗北の中からも彼らの総括によって新たな支配体制を形成してきている。われわれは、このような中から、有田氏の剽窃事件とその背景を明らかにしつつ、外破を突破するものとして抑圧体制への反撃を開始する必要があるだろう。この背景に対する鈍い反応は危機として迫ってくるといえる。

般若波羅
三蔵法師故無
倒夢想心
般若波羅
三藐三菩
多是大神

編集だより

編集局では、読者諸兄の建設的な御意見、御批判を期待しております。なお、投稿される方は、地下BOXまで。（編集局）

WINE & TAE
関大天六学舎前に　憩の場
SNACK 喫茶　きガール
TEL 351－9166

気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六バス操車場横　TEK（351）9527

関西大学資料室蔵
資
昭 2.-5
吹田市・山手町

沖縄人民の反撃コザ暴動

暴力の日常化と内乱への止揚の視点

昨年末十二月二十日未明から数時間にわたって展開された「沖縄コザ暴動」は、沖縄斗争における新たな地平を切り開いたものとして注目される。

この事件は、戦後二十五年間、直接の契機の米憲兵による交通事故処理の不当性を起爆剤に爆発した、被抑圧人民の自然発生的なものである。当初、単なる「騒ぎ」として起ったものが、数時間および、明らかな被抑圧人民への反乱的性質の「暴動」へとエスカレートしていったのは、暴動鎮圧に出動した武装憲兵隊による威かく射撃、催涙ガス等々の権力の一力による弾圧を媒介に見せつけられ、その支配の実体を再確認したからにほかならない。このような人民の怒りは、武装憲兵を四散させ、日米治安機構を分断し、基地ゲートを突破するとゆう、支配者に対する大きな恐怖を与えた。

この日米支配者の二十五年に渡る抑圧に対する沖縄人民の実力による反撃に対し、米軍当局は、これを「偶発事件」として処理するとゆう、人民の反乱意識の陰蔽化を策動しつつ、毒ガス撤去中止、沖縄の本土復帰の遅延とゆう脅喝を加えてきている。同時に日本政府も、このことが憂慮されるとして、米軍当局と一体となった事件の歪小化、人民に対する脅喝を開始している。しかしながら、支配者の意図にかかわらず、沖縄被抑圧人民の実力反撃はすでに始まっているのであり、米軍、機動隊等の権力の武装に対する人民の武装の必然を実感し、暴動→反乱（内乱）→内戦への志向は明らかである。沖縄人民の長き忍耐は、全軍労斗争→日米反革命同盟再編強化の狙としての大量解雇攻勢に対する全軍労ストを契機に飛躍的に流動を開始し、コザ暴動によって明確な沖縄階級斗争の指標を得たであろう。ここでわれわれは、沖縄問題について再確認しなければならない。

日米両帝国主義は、沖縄において「農地返還」＝基地拡大＝農民の基地労働者への転化とゆう矛盾を包みつつ戦後二十五年に渡って沖縄支配を貫徹してきたのであるが、ベトナム侵略反革命戦争の拡大により、その基地沖縄の矛盾として、同時に全軍労＝基地労働者をして沖縄階級斗争の核とならしめたのである。すなわち、基地労働者の斗いは、その矛盾の根源としての基地、その意識性の覚醒であり、それ故に安保→政治斗争と直結する構造をもつものである。また、米軍政による絶対的強権的支配は、基地労働者にとっては（沖縄全人民もちろん）その異質として、日帝への幻想＝「本土復帰」の幻想を抱かせたものであり（また生活的な問題からも不安があり）、階級形成の遅延があったわけであるが、六九年二・四ゼネスト挫折→六・五ストを経て昨年一月第一波、第二波ストと崇り、大量解雇を媒介、飛躍的に階級形成が進行している。それが、斗争の質を一変させる程の影響力を持つがゆえに、沖縄人民の左右への分解は著しく深化し、即ち基地関係業者による「スト破り」の「暴力」をそれに対する基地労働者の「自衛武装」とゆう形であらわれた。それは具体的には、大学における右翼のスト破りに対する全共斗のゲバ棒＝ヘルメットの「自衛武装」と同様、沖縄においても、米軍＝米兵＝業者のスト破りに対するゲバ棒＝ヘルメット「自衛武装」として大衆化して行ったのである。

沖縄における既制左翼及びその支配下にある団体の破産は、日帝への幻想＝「本土復帰」の幻想を払い去れぬところにあり、基地労働者の沖縄斗争における斗争主体への進展は、この幻想の突破にある。即ちそれは、日帝が「本土復帰」に企図するところは、日帝の帝国主義的再編の環としての沖縄のアジア侵略前線基地化にある。それゆえ、日帝にとって沖縄返還は必然的動向である。

基地労働者による「基地撤去、米軍政打倒、日帝の侵略前線基地化阻止」斗争は、今ようやくその緒についたばかりであるが、同時にそれは急激に進展しているといえる。今後、基地労働者にとってその組織力に基き、日米米両帝国主義に対する、具体的にはその暴力装置に対する「組織された暴力」の構築が課題とされるであろう。それは、すなわち「自衛武装」の止揚であり、それと組関的に、第二、第三のコザ暴動→反乱という形で自常化させていかねばならないという運動思想に課せられた内容としてつき出されているといえる。

論説　有田剽窃事件と右翼支配体制

有田剽窃問題は、関大における教学体系と支配構造の実体を露呈したものとして、われわれ学生にとって、決して見過ごしにはできない問題であるだろう。この剽窃と云う事実を見るとき、有田教授自身において、その学問的良心の片鱗すら認め得ないことは、われわれ関大に学ぶ者として、極めて残念なことである。

われわれがこの問題について考えて行くとき、まず第一に挙げられる問題点はこのことである。それは、正か不正かと云う形で述べられる基本的なものであり、教授としての学問的良識と資格の問題であるだろう。そして第二点として、この剽窃問題に対する経済学部教授会の組織的責任がある。このことが、かなり以前から問題となっていたにもかかわらず、教授会における長い討議の結果、不問に付されたと云うことは、その教授会の実体をこそ推して知るべしであろう。

以上の、最も基本的な二つの問題点を徹底するならば、大学当局が「教える者と教えられる者」と云う支配関係を強権的に再構築しようとするこの頃の現実としての「大学改革案」＝そこにうたわれている教学方針の現実化とは、この剽窃問題に見られるようなことにほかならないことは明らかであろう。このようなハレンチな問題を生み出す温床を作りながら「大学改革」を語ることができるであろうか。

ここで、われわれはもう一つ知らなければならないことがある。それは、過去における経済学部内での処分についてであるが、同学部教授会は昨年四月、研究不足を名目として、当人からの事情聴取、意見述べさせると云うことは一切抜きに、久松俊一助手を追放処分としている。これは、久松氏の思想・活動に対する、関大右翼権力による陰なレッド・パージであることは云うまでもない。見に「剽窃」に関しては、学問的良識をもって、M助教授を一年間の謹慎処分としている。このことから、前者は関大右翼権力の政治体制の下での、逆らう者に対する不当な制裁であり、前述有望な一青年を闇に葬り去った事実は否めない。後者は学問的蓄積の課題が問われているのは、教授陣そのものであることを物語っている。

次にこのような剽窃問題を生み出した「関大支配体制」について、とりわけ六八年以降から、その要点だけでも述べて行かなければならない。即ち六八年、一部において斗われた学友会斗争の底流は、関大における権力の学生支配が、右翼学友会中執の下になされて来たことに対する総反乱型の斗いとしての口火としてあったことである。この斗いと、これに続く六九年初頭の社会学部学会問題をめぐる斗争は、結果として右翼＝体育会、応援団＝大学当局の雇兵＝暴力装置のテロ、リンチ等によって、力関係において敗北を余儀なくされた。そして、ここから六九年関大斗争（全共斗結成→大衆の武装→右翼追放）へと突入して行ったわけであるが、この過程において全共斗は「関大右翼支配体制」を徹底的に追究＝暴露＝突破して行ったのであり、事実上右翼暴力装置を粉砕し、当局の学生支配構造＝右翼学友会による学生自治を破産させたのである。この破産は、当然大学当局も自らの破産として捉えたのであるが、その対策として当局が考えたのは、教授会による収拾である。これは「関大改革案」（改革案批判については、本紙第二三号の拙事を参照されたい）によって明らかであるが、学生を一切大学運営から遠ざけたところで、学友会自治に代って教授会自治を前面に押し出したものである。しかしながら、大学の人事、財政等には一切関与できないのが教授会の実体であり、このことは、教授会とは常に人事、財政の権力に更に警察力導入を左右する理事会の支配下に置かれているもの＝骨抜きの教授会として、擬制的欺瞞的な議会主義的内容のものでしかない。

即ち、理事長＝事務官僚、保守反動派教授によって包括される関大支配体制は、自らの防波堤と、自治の幻想を被支配者に与えると言うところから「教授会自治」を改革案によって企図したのでありその教授会とは、先に述べたような実体であるが故に、保守、反動派を中心とした自主規制によってのみ成立し得ることは明らかであり、改革案のより一層の反動性は言うまでもない。

更に追究して行くならば、大学当局の当面の目標である七一～七二年授業料値上げ案は明らかになってくる。改革案による右翼学友会自治から骨抜き教授会自治へのすり替えは、今述べてきたようにより一層の反動性、弾圧性を有するものであり、一方においてミニミニの自治の幻想をありまくることによりその主張なる問題である学内治安体制を強固にせんとするものであり、常に学内を戒厳令下に置き、いつでも機動隊を導入せんと言う脅喝と共に、学生弾圧体制を強化せんとするものである。これは、現在行なわれている千里山学舎夜間、休日ロック、アウト政策によって明白であり、六九年の千里山学舎機動隊導入、金学ロック、アウト、天六学舎における前期試験強行の為の機動隊待機、二部斗争委締め出し等々を目常化したものであり、大学構内からの活動隊学生の一掃を最後的に行なおうとするその端緒である。

このようにして、来たるべき授業料値上げを容易にし、私学経営の安泰化を計ることを当面の課題としている。この背景において、教育体系の帝国主義的再編の完遂を目指している。このような権力による入学、財政、警察力による「力」の政策は、社会的矛盾の爆発＝顕別的には関大右翼支配に対する学生の総反乱＝の胎動が激しさを増すことにより、より一層強権力的、露骨化してくるのである。

以上のように、大学改革案の意図するところ、現実の有田剽窃問題との関係は、われわれにとって、その内容の何であるかを象徴、暗示しているものとして受けとられる。では最後になって行くべきであるのかを考えなければならない。

大学当局は、教育の向上は学生を教室に縛りつけることとして、学生支配を容易にし、学生の企画的能力の開発を、教育の名によって喪失させて行くことを企図している。これは即ち産学協同路線、大学を知的労働力商品生産の場としているところにあり、これを完遂せんとするためには、その最も具体的な矛盾のあらわれとしての有田問題は、大学当局として、大衆に対しては絶対に隠蔽しなければならないことである。再度述べなければならないが、まさしくこの有田剽窃問題は、教授としての学問的良識の問題であり、教授の資格の問題である。そしてこの剽窃事件が以前から問題になっていたにもかかわらず無用の時間を空費し、結果として不問に付し、大衆に対して隠蔽した教授会の組織的責任性の問題である。二点においては、学友会執行部が中心となって、この問題を大衆の前に明らかにする作業を、早急に進めなければならないだろう。

このような、大学の支配体制の下では、学友会は、その提唱する実体なき学友会自治論からくる論議の不毛性を深く認識しなければならない。この問題を前にして、われわれ学生大衆は、学友会執行部がこの限界性を突破することを待望するものである。そして、この剽窃問題に対して、学友会執行部が先頭に、まず三者懇談会の場において大学当局＝教授会を追究し、更に学生大衆の者にこの事実を明らかにして行くことを切望するものである。われわれは、決して自先きの妥協的運動にのみ捉われてはならない。常の問題の核心に迫る視点と行動を有しなければならない。そして、すでに教授会において解決したとか、試験前だからとかゆう理由でこの問題を回避するならば、学生として、われわれ自身の良心を問われるであろう。

教科書・参考書はお揃いですか？

あなた自身の学問の充実を！

書籍・文房具・事務用品

関大生協外販部天六

性的疎外とウーマン・リブの限界

―資本との全面対決を―

現代に於いて人性〉は、どのように疎外されているか？そして、その人性〉的疎外情況を止揚し、真に、人性〉を解放する運動体の構築は、いかになされねばならないか？この二つの事を、現在日本でもマスコミに報道され始めた、ウーマンリブ（女性解放運動）という、革命的ドンキホーテ派の事を通して考察したい。

現代、国家資本主義体制化における人間の人性〉、は女人性〉としての人性〉でもなく、男人性〉としての人性〉でもない。ウーマンリブは、個別的な人性〉に把われすぎたために、原理的な人性〉そのものを見おとしてしまった。女人性〉（男人性〉も同様だが）としての人性〉は確かに、現体制化では、商品化してしまっている。しかし、個別的な（幻想としての）人性〉はもはやそれぐらいの値うちしかないものである。その、個別的な人性〉は、人間にとって切りはなせないものである。

だが、人性〉それ自体ではなくて、上に、人男〉あるいは人女〉という人性〉の本質とはまったく関係のない付属物がつきまっている。われわれが闘いとらねばならぬのは、人性〉の解放であり、ウーマンリブのように、個別的人性〉の解放ではない。女人性〉（男人性〉）等は、19世紀ブルジョアジーが生んだヒューマニズムに接触してしまえばよい。（だが、ブルジョアジーは19世紀ほど甘くはない。その人性〉をすら、人間から疎外させてしまったのだから）ウーマンリブの辿むところは、その女人性〉なるものを掲げて、自己矛盾から崩壊するか、あくまで居直り続けて、結局敵なき敵を追い求め、反体制的運動の中をさまよい歩くかそのいづれかである。だが、個別的人性〉は、始めにもいったように幻想や正確にいうと、非幻想的幻想である。それは、現実に存在してはいるが、セックス行為としてしか表れないからである。（セックス行為は、全てのものが管理され情報化された現代社会において、一番生理的、具像的な行動であると考えられるが、そこにおける人間関係＝性的共同体は、現代資本主義体制の基礎である家族を作りあげたものであることを考えると、セックス行為は、たとえ現実であっても、人間関係は、性的幻想共同体として出てくることにかわりはない。

では、われわれが真に解放されなければならない、人性〉とは？それは、現代では、個別的人性〉の過多の為にさらに、人間の疎外を行なってきた資本主義管理体制の為に人間を対象化させる政治の論理の貫徹の為に、と幾重にも疎外されしつづけてきた実存的人性〉である。人性〉それ自体が、人性〉として存在するような人性〉である。つまり、抑圧の解放のように手段化あるいは目的化といったものがない人性〉である。しかし、人間が現実的に生活する人間であるかぎり、たとえ資本主義体制を打倒したところで、実存的人性〉は疎外されるのである。

裸人間人いやあらゆる動物人は、本能的自己保存人その未来的形態である種族保存人欲求によって、セックス行為を行なった。そこで始めて、真の人性〉を知ったが、同時に、個別的な人性〉をも意識するにいたった。実存的人性〉は、性的共同体の中では、その共同体の生理的結合力の為に、幻想視され、疎外された。真の人性〉を求めれば求めるほど真の人性〉は疎外されつづけるのである。その上、現代では、性的共同幻想体を基礎にした国家資本主義体制がますます、人性〉を個別的人性〉と共に疎外し、悲観的にも、その両方を混乱させカオスの状況を作りあげている。国家資本主義体制は、遂に、そのカオス的情況の中で、自らの基盤である性的幻想共同体をも破壊し再編しようとするところまできたのである。これが体制の家族崩壊の意味であろう。われわれは、単に家族帝国主義打倒と叫んでみることで、人性〉を解放することにはならないし、それどころか、家族を解体して、人間を分解することによって、体制は、その帝国主義的人民管理を安易にしようとしている。われわれが真に、実存的人性〉を解放しようとするならば、人間の持つ生理的自己保存力、現代の性的疎外情況の二つの根本的な問題を原理論的に解決しなくてはならないだろう。しかし、現代がカオス的情況であるかぎり、体制側の巧妙に対して、性的価値体系を変革できるはずである。その性的価値体系の変革こそが唯一、二つの根本問題の解決への道であろう。

現代は、前に論じたように、体制からも、あるいは、ウーマンリブのように反体制側からも家族の破壊がなされている。いったい、家族の破壊とはわれわれにとってどのようなものなのか。家族＝性的幻想共同体の破壊をいかに、性的価値体系の変革への結合させていくのか。ウーマンリブのような革命的男女同盟禁義では、真の破壊は出来得ないのは明白である。

のには、われわれは、次の事を確認しなければならない。共同関係は、幻想であるが、その根底はわれわれ自身であるという根本的原理が彼たわっているという事。つまりラディカルに行動しなければならないということである。（空間的、時間的等われわれの全ての生活領域を規定するものであるから、簿っぺらな自己否定と通用しない行動である）。確認した上で、取りかかることによって。体制は、すでにわれわれに、上からの性的混乱という形で崩壊の地盤を作ってくれているのだから、それを、性的幻想共同体の破壊へ向けるエネルギシュな運動へ転化させねばならない。その為には、その幻想共同体の幻想的構成員である、「われ」という個人の中の、生理的自己保存欲求の、個別的人性〉を意識する中で、その相手の中に、実存的人性〉を見出さねばならない。実存的人性〉は、個別的人性〉の中では、個である「われ」が問われなければ、決して表われない。相互に問うことによってのみ個別的人性〉から実存的人性〉を見出せるのである。（しかし、その実存的人性〉も再び、性的価値体系の変革がなされなかったならば、体制の中に取り込まれて、上からの家族破壊の補助物として扱われるだろう）このような相互扶助的な行動が性的価値体系変革の必要条件であることはこれでわかったが、それは個別的人性〉を乗りこえ、性的価値体系変革を為し真の人性〉解放を勝ち取れるだろうか？先きに性的価値体系の変革こそ唯一の道といったがもう一つ重要な点を忘れていたがそれは、性的価値体系の変革と共に、カオス的情況の中には、（それがカオスであるかぎり）論理的には証明できない反逆のパトスがある。この反逆のパトスとは、真の人性〉が実存的人性〉である由に、幻想的共同体の中にある性的幻想性がもっている内部矛盾である。このパトスが幻想を内部から崩壊させる原因である由に、われわれは、性的価値体系の変革と、この反逆のパトスを弁証法的に取り込み、真の（実存的）人性〉の解放をなし得ねばならない。

乱気流

▼七〇年代の〝狂気〟は、権力の手に先取りされ、あらゆる生活領域にわたって民衆の上におそいかかる。支配者の〝狂気〟は〝公害〟として人民の生命を断ち、銃弾となって学生の生命を奪う。狂気の日常化は、大衆の反抗神経を鈍化させ、それ故に支配者はやすやすと大衆のいっさいを収奪し、社会的隷属の強化を計る。だが、大衆は已のいっさいをブルジョアジーの手に渡すことによってのみ保障され、文字どおりの「死んだ生」を生きることを知っている。それ故に大衆の〝生〟とは、支配者への復讐を根拠とする。▼〝復讐〟が、自己解放への主体過程として対立物（資本）の全面対決を要請する。しかし、その中で試行錯誤のくり返しを続けるわれわれは攻撃の視点を明確にしていく必要があるだろう。支配者の攻撃はいっさいの運動性を体制枠内に閉い込むことによって、大衆の反撃を現実の前には無力化させていき大衆のエネルギーを、彼らの局部からそらす。したがって、彼らへの〝復讐〟とは、いかにその盲点に向けた攻撃を展開していくのかということが現実的課題として突きつけられているのである。▼エンゲルスは、彼の労作「家族・私有財産および国家の起源」の中に婦人と社会総体の関係を展開した。「青踏」運動の現代的な意味を内包したウーマン・リブは、マス・コミ的な注目の中で、独自の運動を展開していった。だが、被支配者としての〝婦人〟解放とは、現実的体制の中でいったい何であるのかという視点を抜きにして語られるが故に、その本質との対決が現実化されないのである。名確に〝敵〟が設定されない弱さが、そのみせかけの戦闘性を観念の世界にしか表出し得ぬのである。支配者は、その弱さを逆手にとって、先進的意識を彼らの枠内に崩落させていく。我々の〝資本〟との対決が、政治的有効性を持ちつつもその再びが現実の前では空しく響くのは何故であろうか。▼〝狂気〟の時代は、被抑圧者の根拠ある〝狂気〟を誘導させる。沖縄の暴動は、日米帝国主義の支配の下にある沖縄人民の表現しきれぬ苦渋の体現であった。「沖縄返還」の欺瞞性を明確に暴露しつつ、急激に自帝の帝国主義的再編の一環としてのアジア侵略前線基地化への阻止闘争として具体化していった。沖縄における人民の怒りは、現実的体制の中で、その生活全域をかけてすでに始まっている。観念の世界での〝闘争〟から、現実に向けた闘いを組織し、その端を渡定することが急務の課題である。▼支配体制強化を計る大学当局の露骨な学生への抑圧体系は、「関大改革案」をもって学生の一元支配を貫徹せしめんとする。過去の苦渋した憲法とのつかれた彼らは、学園闘争の突きつけた問題をどうも反芻することなく短絡的に秩序回復に狂奔する。有田飄窃事件は、明確に現在的な教授・教授会の盲点追究として設定される。この事件に対する鈍重な反応は、われわれの危機として迫ってくるであろう。まさに、〝狂気〟に対する我々の〝狂気〟の反撃が要請される情況である。▼防衛が末端の警察官に手を教育、徹底化されていることが明らかとなった。

革命派として、これは当然予想していたことであるだろう。今この局面において更なるゲリラ活動が、今後目常化することはいうまでもないだろう。

しかしながら、現在もっとも急務とされることは、このような日常的ゲリラ斗争も当然ながらその組織の確立＝革命党建設をこそなさねばならないということが新左翼の運動に対する義務としえるだろう。七〇年代階級斗争を分担に担い得る革命党の建設は、まだその緒についたばかりであるが、それを完遂してこそ初めて偶発的な街頭ゲリラ斗争が、真に目的意識をもち組織化されるといえるだろう。

革命党（革命軍）の建設と、大衆の組織された暴力の構築は、とりわけ七〇年代日階級斗争において急務とされるところであり、この地平からこそ、プロレタリア革命＝恒常的武器権力斗争が展望されるというのが現段階の問題としてあげられる。

新左翼の質的転換とは

京浜安保共闘のつき出したもの

昨年末、東京における「京浜安保共闘」による交番襲撃とそこに起った警察官によるためらいなき発砲＝射殺は、当然起るべきものであったと考えられながらも、権力による殺害を含む弾圧の日常化具体化として直視としなければならない問題である。

革命派による、権力の暴力装置に対する現実的な斗いは、一昨年における〝赤軍派〟による警察署交番襲撃以来、権力のデッチ上げの呼び方をそれば、とりわけ「新四派」＝赤軍派・RG（エルゲー）、京浜安保共闘、アナーキストグループを中心に日常化されて初めてゲバ棒によって武装し、人民の武装権力斗争＝組織された暴力の別名を示したものであり、日本階級斗争に新たな局面を作り出した。それ以来、人民の自然発生的な武器としてのゲバ棒、石、火炎ビンを持って権力＝暴力装置としての機動隊と対決してきた先駆的運動は、人民側の意識性、暴力性の進展により、当然権力は強権的弾圧の手段の多様性のもとに治安体制を築いた六九年四・二八斗争を頂点としてゲバ棒斗争の限界性は明確となった。この四・二八斗争以来、新左翼内部において下の限界性の突破を目指すさまざまな動きがあったが、その具体的表われとして「新四派」（この呼び名は、もちろん権力のデッチ上げであり、新左翼諸党派のあらゆる大衆運動、街頭斗争を戒厳令・検問という形で分断＝抑圧しようとする権力の予防反革命のゆえのものである。）の前面への登場となってきたのである。

この革命派による内乱を志向したゲリラ斗争は、いまだに確立されてはいないがその端緒としての政府権力および日米反革命の中枢に対する恒常的暴力斗争がくり返されている。その具体的な一つの例が警察署、交番襲撃＝警察官の武器奪取としてあり、六九年赤軍派、さらに今度の「京浜安保共闘」がそれである。それに対する当然の権力の対応として、襲撃者の射殺をも可とした

WINE＆TEA
関大天六学舎前に　憩の場！
SNACK喫茶　きガール
TEL 351－9166

気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六市バス操車場横　TEL（351）9527

評書　反国家と自由の思想

大沢正道著

一、組織の虚構性

前号（第二三号参照）では、大沢正道氏の革命論、自由論について述べたが、今回ではこの書の骨格をなす国家論、組織論を展開していく。

「人間は、〈われ＝なんじ〉の出合い関係の世界に入ることによって人間となり得たのだが、同時にそのことによって〈われ＝それ〉の対象と利用の世界を創り出し、自らの手で人間を殺ろうとする。この悪魔的な存在の弁証法こそ人間存在の根源に横たわる論理である」と著者は論じている。この論理には、異議なしであるが、しかしその〈悪魔〉も論理学的には、利用体の中で失われた自己生命＝力も共同体の中を通り過ぎた時（共同体の力Ⅳ利用体の力）には再び自己生命＝力は、自己へ環流されて、ハッピーエンドとなるらしい。Ⅳの組織論では、「現実主義と理想主義との矛盾、葛藤〈政治と社会〉、対立抗争が作り出す緊張＝弛緩の関係こそ人間の実相であり、同時にまた組織の実相である。緊張（均衡）において実相は生きた相貌を呈し、弛緩（破綻）において死んだ相貌を呈する」と論じられているが、前述の人間存在の弁証法から後のハッピー・エンドまでは、緊張の論理といったものなどは一かけらもない。組織あるいは、国家とは決して論理学的に否定できるものではない。権力の介入しない組織はもちろん必要であるが、その〈〉手段として合意をもち出すのは若干楽観的であるといえる。合意の第一条件とはいうまでもなく〈利害の一致〉であるが、その〈利害の一致〉とは、他人を利用する〈吾＝それ〉の関係に他ならない。それは、現実的に〈利害の一致〉とは例え階級的利害であっても、他人の人間的側面の否定＝やさ的連帯感の喪失であるからといえる。〈利害〉の中に内包する連帯性とは人間関係における全一性の否定であり、幻想的人間関係の中でのみ役に立つ代物である。その〈利害の一致〉を前提条件とする〈合意〉を手段とする組織は、やはり権力の介入を許さざるを得なくなるのではないだろうか。

それでは、一体国家を否定、あるいは国家に叛逆していくものとして何をわれわれは構築しなければならないのか。小田実の個人原理は、著者の述べたように〈組織原理〉に再び立ち戻らなくてはならないし、さらに〈軍〉から〈単一党〉という方針は、前号でその破綻を示した。著者は、組織を二つのモデルに分け、(1)「人間の中の組織」(2)「組織の中の人間」とした。だが、この両方ともが権力の介入を許すのである。われわれの否定する国家が、権力による組織の拡張態である以上、この二つのモデルの緊張関係の中で右往左往できないのである。しかし、組織は、人間の全一性を吸収し単一化させてしまうものである。国家からさらに根拠としなければならない関係の世界からも疎外されたわれわれに残されたものは、特攻隊の青年のように国家とナルシシティズムに満ちあふれた心中をするのか、あるいはニヒルなポーズとの国家の中に吸収されていき消化される二者選択の道しかないのであろうか。

二、組織からの訣別

人間は利用体の中で幻想を抱いたまま死ぬことができる。この中の人間は〈人間〉ではないが、しかし現実的には人間は〈幻想的華麗論〉を持つことが寛容的に許される。マイホーム的発想とは、この延長上に設定されるものだが、この日常生活を否定し、乗り越えることは家族＝性的連帯を持つ〈幻想共同体〉を根底的に解体しないかぎり国家を根底的に崩さぶることはできない。国家の根底とは、この家族的幻想性である。〈幻想〉は、現実の仮装を消せられた時には、裏の現実（それすら本来的には非現実ではあるが）より現実的になる。〈利用体〉という現実は、否定＝死という絶望的構造で国体という国家の概念の中に居すわる。その現実の追体験を重ねているわれわれが〈人間〉という幻想（あるいは想か）を抱いているのかもしれない。革命を志向し闘うことにおいても人間の全一的解放の斗争においても、利用体そのものの否定はされなかったといえるだろう。それゆえに、〈自己否定〉は再び〈否定〉から〈変革〉への道に至るまで、共同体の中を通過しなければならないのである。しかし、共同体は幻想でしかなかった。相手を対象化させる暴力とプロレタリア的人間へ自己変革するというセクトが残った。さらに、軍事的組織のアジテーションに陶酔することのみが、生きた現実から遠ざかるとであるという錯覚に陥ち入り、〈〉と転化するという構造を持っ

新左翼〉の中へ自己投企していったのである。しかし、国家はその情緒、行動のすべての領域を規制する存在様式でさえあると著者は語る。現実的生活は、国家がわれわれの存在を規制する価値体系であるかぎりその中の活者は、疎外を論理的に理解し得ても、感性的には真に理解、あるいは感じとることはできないといえる。生活者である〈吾〉は著者のいうところの〈なんじ〉を感性的に見い出すことができないのである。

〈吾〉―〈なんじ〉の関係は、国家に規制される生活者であるが故に〈吾〉に常に規制されていく。国家の根底は、前述したように〈家族的幻想性〉であり、さらに原理的には生活者である。ここで生活者の概念をはっきりさせよう。生活者とは、国家の中で〈吾―なんじ〉の関係を否定され、さらに〈吾―それ〉という対象化の世界でも〈吾〉ではなく〈それ〉として存在し、〈吾〉の持つ三つの側面を持たないものである。つまり、〈吾〉の不在によって、〈なんじ〉という超意識＝価値体系を変革することは出来ない）〈吾〉の中に、〈それ〉が存在することによって〈吾〉は〈それ〉と転化するという構造を持っ

をかぶっていた国家が、〈なんじ〉を奪いとりまた、〈吾〉を〈それ〉へと変えたものであることを知った時である。その時、彼らは〈それ〉の中で、〈それ〉であることを否定し〈吾〉をみつけ出そうとする。三里塚の農民は土地に介入してきたことにより〈吾〉〈なんじ〉〈それ〉の関係構造を明確に知った。それ故に、国家に対置し日常性からの価値体系の変革を成し得てきたのである。国家に内在する生活者が、国家に叛逆する時、自らの生活を否定しなければならない。〈生活者〉とは、プロレタリアートへの自己変革という〈階級的〉目的を持つものではないが、自らの生活を感じることもできず（それ故に共同体を構築することは出来ない）〈吾〉の中に、〈それ〉が存在することによって〈吾〉は〈それ〉である。しかし、国家の中で〈それ〉としてある〈吾〉は〈それ〉

存的超越感である〈なんじ〉は、国家の幻想的共同性の中では決して表われない。〈なんじ〉を求める運動は〈それ〉の中で再びより以上の〈それ〉としての重層的行動へ自己を狩り出さなくてはならないだろう。

われわれは、生活者としての〈吾〉を取りもどす為に国家を否定していかねばならないということである。著者は、国家に社会を対置させるという論理をたてるが〈吾―なんじ〉の関係である〈社会〉は幻想しかないといえる。それである故に、権力のない組織、そして〈社会〉を対置させ国家を乗り越え、否定する「反国家」の思想を構築できないのであるのの否定とはいかなることであるのかを述べてみよう。〈生活者〉であるが故に、われわれは〈それ〉としての生活者に思想的根拠を置かねばならない。

三、生活者の原理的緊張関係

〈それ〉であることで〈それ〉が成立する時にのみ、〈それ〉はひとり立ちするが、国家という組織の中で〈それ〉＝〈吾〉であり〈吾〉に戻った時〈なんじ〉が、存在するというのは幻想である。〈それ〉は、本来〈吾〉であるが故に〈吾〉へと自己分解させる力を持つ。では、その転化させる力とは何か。幻想的共同性＝国家の中では、幻想である〈吾―なんじ〉の関係構造の世界がある故に明確なその構造式がとらえきれないのである。しかし、〈それ〉と

あることによって、〈それ〉の否定＝〈なんじ〉の復権という方程式で結ばれるのではない。〈それ〉で存在せしめているからである。〈それ〉の否定は、〈吾―それ〉

体である国家における〈それ〉とは、二つの構造を持つ。一つは、〈それ〉であること自体が〈それ〉の存在をならしめているということ。三島由夫は、自らが〈それ〉であることに自らの存在を投じた。現実は、〈それ〉であることを否定する。つまり、国家とは〈それ〉であることを自覚させないものである。国家の本質が、幻想的共同体であるのはそれ故である。〈それ〉の否定は、アプリオリには、〈なんじ〉の侵犯である。〈それ〉は、〈なんじ〉を介在させない。観念としての〈なんじ〉はあっても、決

であることの否定の道を求めていかねばならないということである。国家がその罪を止揚するのがプロレタリアートを国家と対置するのは、果して有効であるのか。生活者であるが故に〈それ〉の中で〈それ〉を否定するが、プロレタリアートは自らが〈それ〉であることを急激に〈吾〉へと変革することを目的とする。しかし、〈吾〉とは、決して〈吾―それ〉の構造の中では〈吾〉となり得るのである。〈それ〉は、〈なんじ〉を介在させない。観念としての〈なんじ〉はあっても、決

は〈吾〉であることを知らされた為に、〈なんじ〉の幻想性を知るのであり次には、〈吾―それ〉の関係構造を知るのである。そしてここで、人間は〈吾〉であることに疑問を持ち〈それ〉と、実は自分自身であることを知る。

〈それ〉の否定は、〈吾―なんじ〉を複雑させはするが、〈それ〉自体すでにひとり立っている故に、別の〈それ〉を幻想共同体の中に見い出さねばならない。つまり、生活者が根底となっているこの自らの〈生活基盤〉をくつがえすことである。換言すれば、生活者が生活を否定するということである。生活することが、〈それ〉を増させているという論理から、〈それ〉の中に内在している幻想的共同性を折出していき〈それ〉の中に、〈吾〉と〈それ〉を別解させる力を多い出すことにある。その方法とは、〈それ〉を〈それ〉自身として否定するのではなく、国家幻想の中にあるところの〈吾〉の部分を逆手に取り〈吾―それ〉の幻想を打ち破り、国家の中の〈吾〉を〈それ〉に替え、〈それ〉を〈吾〉に替えることである。三里塚の農民はこの逆手を見事に完成しかけている。

彼らは、農民である故に国家の幻想的価値体系（土地の所有）を変えた。三里塚においては、土地の所有はもはや〈それ〉としてあるのではなく〈吾―なんじ〉の世界をつくる根拠地となっている。その中で、国家権力の弾圧しようとしているのは、まさにこの価値

体系の変革に対してである。しかし、一度真の〈吾―なんじ〉の世界をかいまみた農民は決して敗北することはないだろう。

真の〈なんじ〉を求めるということではなく、〈それ〉を否定する生活者と〈吾〉を〈それ〉に替え、〈それ〉を〈吾〉に替える＝価値体系の二つの道の緊張関係でのみ国家と対置できるのである。この時点において、著者の緊張論理が生きてくる。国家は、常にわれわれの全一性を阻んでいるが故に、この緊張の論理は必要であり、この論理の消滅そのものがわれわれの死であり、国家の中に生きび〈それ〉へと導くのである。

仏教の輪廻のようなこの悲劇的存在構造は、いかに〈なんじ〉の復権を持つのか。これには、〈それ〉の持つもう二つの構造、つまり〈それ〉は自身のうちに〈それ〉を分解する力がある。この側面より〈輪廻〉を断ち切る方法を考察しよう。

編集後記

新入社員募集！われわれを取りまく激動的情況を主体的に取り入れ70年代闘争をにらっていく先進的一、二年生諸君、新聞製作を通して、理論活動・政治闘争等を共にやっていこう。諸君の入社を、地下BOXで待っている。

（組織局）

第二一四号を発行します。諸事情によりこのたびの発行が遅れ、情況に対して便速にその視点、全面を展開できなかったことをお詫びします。なお、今回の編集に対するお意見は、部室まで。